

## 熊本大学学術リポジトリ

### Kumamoto University Repository System

Title	柔道部々報 : 部報
Author(s)	
Citation	龍南, 246 : 81 - 82
Issue date	1940-03-01
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2298/8401">http://hdl.handle.net/2298/8401</a>
Right	

る。冬又支障あり。

三學期早々一年生二人で根子嶽の西屋根縦走をやつた。

霧氷があつてきれいだつたとのこと。

近年ない大雪でスキーが俄然人々の口に上り、部のスキ

ーも部員、部員外、全部貸出してしまつた。

技術も山登りには必要であらうが、技術ばかりでは山を愉しむことは出来ない。技術が一つの智慧である様に、山を愉しむことは一つの膚知である。それかと言つて困難な岩場を歩かなくてもよい。高岳を目指すなくてもよい。自ら「山」あり、谷はある。高原を歩くことは、溪谷をよぎることは又大きな愉しみである。純粹で尖鋭を以て誇る科學的アルピニズムの徒はかかることも感傷だと云つて推さないであらうが、ヒマラヤの頂上を究めるには飛行機でとせば譯はあるまい。

山を登つて文化の形態にそれほど貢獻はすまいが、全て人間の心の働きがそうである様に、山に登つて人は文化のなにかの基礎を歩いてゐる。山歩きは原始の姿を求めると言ふ。原始とは文化の根柢でもあらう。現文化の段階から見では行動の一つとも思はれる。

(小早川)

## 柔道部々報

東亞の新秩序も未だ遠く、西歐に雲亂れ飛ぶ混沌たる中に、皇紀二千六百年の光輝ある年をむかへ、日本臣民としての責任の重大なるを痛感すると共に、部員一同も三年生の方々を御送り致しまして、來るべき夏の大會を望んで、寒風の下にひたすら精進して居ります。

さて我龍南會柔道部が過去に於て、先輩の方々のそれこそ血と涙につづられた榮えある戰蹟を残して行かれました。ひるがへつて自己の現在の部生活を考へる時に、果してこの道場の隅々にまで浸みこんでゐる、傳統と歴史を繼ぎ得るか無條件に肯定出来ないのを残念に思ひます。しかし我々は徒らにかく焦燥するよりも、意氣と熱換言すれば内からわきおこる鬱勃たる精神力をもつて、かく肯定出来る様に努力するのが、部生活をやつてゐる自分としての當然やるべき事、約言すれば傳統と歴史を自己の中に活かす事だと信じます。部生活の意義も勿論文字にあらはされたる理論上の定義ではなくて、自分で具體的生活中に没入して、体得出来るものだと思います。

次に近況をのべると、冬休みに初めの六日間合宿を行ひ、先輩の方々も來られて元氣に終了しました。三學期になつて一月十五日より一週間寒稽古を行ひ、身心鍛鍊に非常に資する所あつたと信じます。

夏の大會に敗れて以來捲土重來を期して精進を重ねて以來半歳余、雪辱の意氣に燃え中原の鹿を獲ようとたゞ文句なしに頑張つて居ます。

終りに昨秋十月十五日の熊本武徳殿に於ける熊本醫大主催の九州高専大會の戰蹟を掲げて追憶を新にし精進の糧とします。

### 福岡高商

大將

三大 神

小 屯

初藤 原

○ 初大 家

初小 川

○ 二西 村

初河 野

二平 田

二安 田

先鋒

初寺 崎

### 五 高

三深 澤

二野 口

二玉 井

二橋 本

二屋 鋪

三坂 梨

二木 庭

初合 原

初森 本

二堀 川

大將

先鋒

### 五 高

大將

三深 澤

二野 口

二玉 井

○ 三坂 梨

初合 原

二屋 鋪

○ 二木 庭

二橋 本

○ 二堀 川

先鋒 初森 本

### 七 高

三吉 野

竹 本

茨 木

二岩 室

池 田

藥師寺

二茶 屋

杉之尾

益 尾

岩 切

先鋒

## 馬術部部報

事變勃發以來四周年或は出征或は凱施と非常意識は彌が上にもかき立てられる折から軍隊に於て兵士と同様に猛訓練を受ける馬術部員の練習は努力敢爲忍耐てふ確乎たる箴言を斷じて守り通さねばならない。更に軍隊の都合にて往々週一度の練習も阻まれる事もある吾等には一刻一時の乗馬も無爲には出來ない。かうした惡條件に苦しめられながら全國高校馬術大會に出場する選手は其の決意や悲壯、其